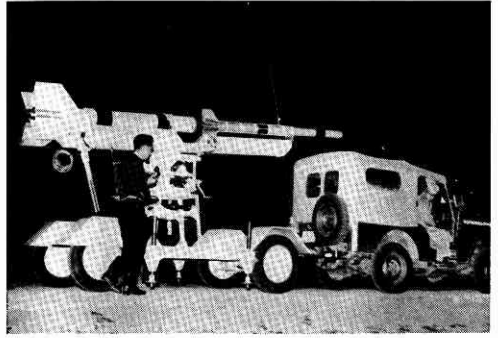
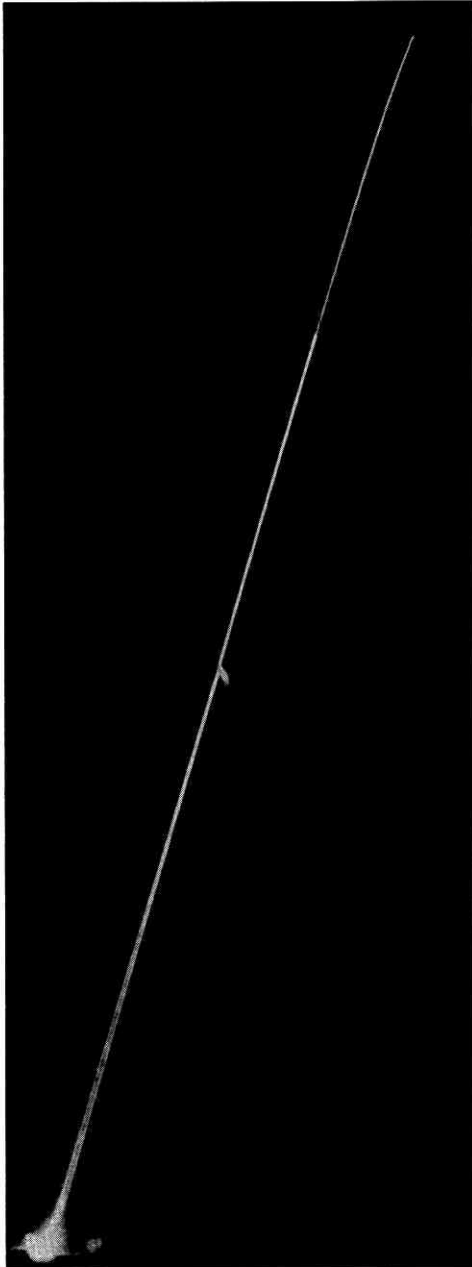


ロケットの夜間実験

ロケットに対する光学系観測を容易ならしめる目的で、初めての夜間実験を秋田実験場で行った。1957年6月22日、この日は、夏至に当り、一年中で一番の日の暮れのおそい日だったのは、皮肉なめぐり合わせであった。とっぷり暮れたのは、午後8時半頃、雲高10,000m、星は、5~6個雲間にのぞいている。天候75点と採点した。実験場後方羽越本線の通過列車を避けて、発射時刻は、午後8時48分と決定された。定刻、カッパⅢ型2号機は、夜空に打揚げられた。



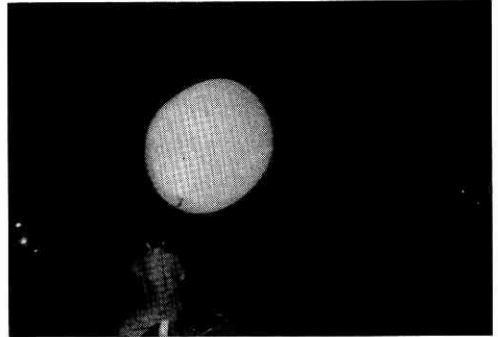
⇨ ロケットは、運搬車兼用のランチャに、準備室の中でランチャングされ、発射予定時刻27分前に、ジープに引かれて、発射点へ移動する。



発射予定時刻 ⇨
23分前に、ランチャ付近から、気球を揚げる。放球は、観測班のトラッキング訓練にもしばしば用いられたが、また、風向、風速等の実験場におけるなまの気象状態を知る資料となる。

発射予定時刻 ⇨
12分前と6分前には、ロケット班が、発光、発射のための結線をする。結線後、導通テストがあつてOKとなつて待避する。導火、抵抗OKで発射60秒前となり自動発射のコントローラが動き出す。したがつて結線は、沈着に迅速に、そして確実に行わねばならないので修練を要する。

⇨ くらやみの中で、カメラの窓を全開しておくと、ロケットの飛跡が、記録される。まず、ブースタの発光が確認され、5秒後、ロケット・エンジンに点火する。写真の残までの太い線は、ブースタ・ロケットの噴射、それから先の細い線は、発光筒の跡、メイン・ロケットの噴射は、この直後にあつたことは、光学系観測班の眼鏡で確認されている。



⇨ 発射予定時刻30分前にB旗を揚げ、赤灯を灯し、サイレンを鳴らす。赤灯は、夜間実験のため初めて装置したもので、主に海上の警戒に備えた標識、写真の左は、計測室で、指令室を兼ねている。その屋根にある白い箱は、音響測定用のマイク、右の階の建物は、テレメーター・レーダ受信室で屋上に、場内照らす二つの投光器が見える。投光器も発射12分前には、消灯して、場内は、真のやみとなる。

